

東彼杵町文化財調査報告書第5集

ひ さ ご 塚 古 墳

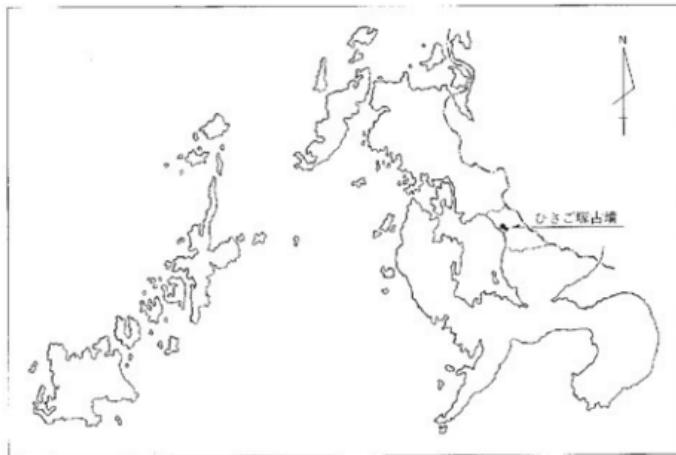
1991

長崎県東彼杵町教育委員会

東彼杵町文化財調査報告書第5集

ひさご塚古墳

— 東彼杵町所在の前方後円墳 —



1991

長崎県東彼杵町教育委員会

発刊にあたって

このたび、ひさご塚周辺遺跡整備事業に伴い、本古墳の築造時の形態や規模の確認のための基礎調査を、彼杵宿郷字古金谷一帯について実施いたしました。

ここに、そのひさご塚古墳調査報告書を国、県費補助により刊行することになりました。

本町では、この古墳を活用し、古墳の整備、復原を計画し、今後の町の発展を促す礎となるよう、歴史公園として整備を行い、歴史民俗資料館建設等も策定中でございます。

今回の調査は、墳丘の築造時の形態や規模の確認を目的として実施し、調査の結果、かなり削り取られたと思われる墳丘の裾の線を確認することができ、古墳成立の背景に貴重な手がかりを与えてくれたことは喜ばしいかぎりです。

今回の調査にあたり格別のご援助をいただきました県文化課の諸先生をはじめ、ご協力いただいた地元の皆様、関係各位に対し、心より深く感謝申し上げます。

平成3年3月31日

東彼杵町教育長 喜々津 前 勝

例　　言

1 本書は平成2年度に国庫補助を受けて実施した、東彼杵郡東彼杵町所在のひさご塚古墳の調査報告書である。

2 調査は東彼杵町教育委員会が主体となり、長崎県教育庁文化課が依頼により調査を担当した。

東彼杵町教育委員会 教育長 壱々津 前勝
教育次長 秋月清己
社会教育係長 山口 章
事務史員 岩広美
タ山口弘子
嘱託開正和
長崎県教育庁文化課 主任文化財保護主事 藤田和裕
文化財調査員 小野ゆかり

3 本書の執筆、本書に関する写真撮影は藤田による。

4 本調査に関しての実測図・写真・遺物等は、長崎県文化課立山分室に保管しているが、将来は町に返還の予定である。

5 本書の編集は藤田による。

本文目次

I 調査に至る経緯	1
II 立地と環境	2
(1) 地理的位置と周辺の地形	2
(2) 歴史的環境	2
III 調査	6
(1) 調査の概要	6
(2) 土層の状況	8
(3) 墳丘の状況	10
・前方部の調査	10
・くびれ部の調査	11
・後円部の調査	12
(4) 墳丘について	13
(5) カサンガン古墳の調査	17
(6) 出土の遺物	17
VII まとめ	18

表目次

第1表 西九州の主要古式前方後円墳一覧表	15
第2表 ひさご塚古墳の諸元一覧表	16

挿図目次

第1図	ひさご塚古墳周辺の地形と遺跡分布図	3
第2図	ひさご塚古墳周辺地形図	4
第3図	遺跡周辺の地形分類図	5
第4図	ひさご塚古墳および周辺の実測図	7
第5図	ひさご塚古墳周辺の土層図	9
第6図	前方部 角の葺石の状況	10
第7図	くびれ部 蓄石の状況	11
第8図	ひさご塚古墳 墳丘現状図	13

図版目次

図版1	ひさご塚古墳遠景	21
図版2	近景と調査風景	22
図版3	前方部とくびれ部での調査風景	23
図版4	土層の状況（くびれ部と前方部）	24
図版5	上層の状況（後円部）	25
図版6	前方部 角の葺石の状況	26
図版7	くびれ部 蓄石の状況	27
図版8	カサンガン古墳と調査風景	28
図版9	カサンガン古墳の土層の状況	29

I 調査に至る経緯

本古墳は古くから知られており、後円部に、小さく削られた前方部の付いた形が瓢箪の形に似ているところから、「ひさご塚」の名前で呼ばれていた。後円部の中央に大きな松があったとのことで、明治35年製版の陸地測量部の五万分の一の地図には権現松の記載がある。

長崎談叢第9輯には彼杵古墳との記載があり、同号の他の報文にも本古墳の所在地と今後の保存についての記述が残されている。^{註1}さらに長崎談叢第26輯に、当時の状況について「瓢箪塚」と呼ばれている、本県で唯一の標本的な古墳である。後円部に老松が枝を張って栄えている。いつからか頂上に神社を祀っている。葺石を使用した跡はあるが、周濠については不明である。現在は田畠で取り囲まれている旨の文章がある。

昭和25年4月10日に長崎県の史跡「彼杵の古墳」として指定を受け、現在にいたっていた。東彼杵町では、以前から古墳周辺の公有化と古墳の活用についての構想を練りつつあったが、実行に移せない状態であった。そこに「ふるさと創生事業」が出現し、古墳を活かし、周辺を公園化して整備するとここなったものである。

町では「ふるさと創生事業」の一環として、古墳とその周辺の公有化、歴史民俗資料館の建設などを中心とする「そのぎの荘整備事業」を計画、平成2年度から着工することになった。この計画では、核となる施設として「歴史民俗資料館」を建設、町内に残っている歴史資料や民俗資料、古文書などを展示することになっている。さらに館外には竪穴式住居の復原や、町内の古い民家の移築も計画されている。屋外のひさご塚古墳について、一層の活用を計るために整備・復原が考えられ、そのための基礎的な調査の必要性が指摘された。

以上の指摘を受け、本古墳の築造当時の形態や規模の確認、周濠の有無やその状況などについての確認が今回の基礎調査の目的となった。さらに、ひさご塚の北西側、数十メートルに位置する「カサンガン古墳」についても調査することになった。ここは現在墓地として使用されているが、将来的なことを考えた上では、古墳であることの確認や、またそうであれば古墳の規模の確認をしておく必要が指摘されたためである。

調査は平成2年度の国庫補助事業として計画され、東彼杵町教育委員会を調査主体として実施されることになった。発掘調査は、長崎県文化課が町の依頼によって職員を派遣し、平成2年11月26日から同12月21日まで実施した。

註1 山淵栄蔵 「先史時代の長崎県」『長崎談叢』第9輯 1931年

註2 江浪時雄 「最近我等の観たる長崎及長崎を中心とする考古学的遺跡及遺物に就て」『長崎談叢』第9輯 1931年

註3 津田繁二 「我が長崎県の先史時代及び原史時代の遺跡遺物の概要に就て」『長崎談叢』第26輯 1940年

II 立地と環境

(1) 地理的位置と周辺の地形

ひさご塚古墳は、東彼杵郡東彼杵町彼杵泊郷字古金谷にある。

東彼杵町は長崎県本土部のほぼ中央にあたり、西は大村湾によって限られ、東は大野原高原や俵坂の峠などで佐賀県と接している。南は大村市に接し、北側は川棚町に接している。彼杵町の総面積は74.2km²あるが、山地が多くて低平地が乏しい。昭和55年10月の調査では、町内の総人口は10,353人となっている。

地形は、北東側と東側に高く、南西側で大村湾に没する様相を示している。町の北東部に、川棚町との境にあたる虚空蔵山（標高 608.5m）がその特異な姿で聳え、南東側には大野原の高位溶岩台地と赤木の中位溶岩台地が続いている。これらの台地は各所で小河川によっての開拓が進み、千錦川の龍頭泉と呼ばれている峡谷や、江ノ串川の弘法峡谷などが残されている。河川が小さいので大きな平地は少なく、沖積平地としては彼杵川流域と千穂川流域、江ノ串川の河口付近と大層限られた存在となっている。

彼杵川は、大野原台地や虚空蔵山など、佐賀県との境をなす分水嶺の西側の小河川の流水を集め、南流と西流をくり返して大村湾に注いでいる。現在の河道は、南西方向に向いた流れが番神山の南麓で南に向きを変え、そのまま大村湾に流れ込んでいる。

彼杵川によって作られた平地の南端部には、海岸性の砂礫丘が残っており、ひさご塚古墳はこの砂礫丘の上、標高 2 m ほどの場所に構築されている。現在の海岸線まで、200m もない。

ひさご塚古墳は、この砂礫丘を意識して構築されたものと考えられ、カサンガン古墳・ワレ権現古墳も同一意識のもとに、同一の砂礫丘の上に造られたものと推測される。

(2) 歴史的環境

東彼杵町では、昭和58年の秋に県の遺跡周知事業の一環として、分布調査が実施された。その結果をまとめ、昭和59年の時点で59箇所の遺跡が知られていた。ここでは遺跡の在り方にについてのおおまかな傾向と、ひさご塚古墳の周辺にある遺跡について述べておきたい。なお、ここで使用する遺跡の番号は『長崎県遺跡地図』（長崎県文化財調査報告書第87集）によっているが、3 箇所は後日、存在が確認されて追加した遺跡である。

町内での遺跡の在り方について見てみると、彼杵川以北では町全体での遺跡の一割ほどが知られているにすぎなかったが、近年彼杵川北岸の微高地で生活址や墓地が発見され、近辺の古墳や古墳群との関係など興味のある問題を提起している。

また一つの集まりとして、無郷・中岳郷の標高300m ~ 400m の高さに10遺跡が知られている。

これは、その付近に集中している溜池での観察が可能であることによるものであろう。他の多くの遺跡は大村湾に面した丘陵先端に近い部分や、彼杵川の流域などに立地している。

東彼杵町の遺跡では、黒曜石剝片等の散布によって先土器時代・縄文時代のものと確認されているものが、全体の7割を超える多さである。そして弥生時代の遺跡については、全く知られていない状況であった。しかし、近年の九州横断自動車道建設に伴う発掘調査で、宮田A遺跡の内容が知られ、圃場整備事業に伴う発掘調査では、白井川遺跡や岡遺跡などの遺跡が知られるに至った。これらの遺跡で良好な弥生時代の遺構・遺物が検出され、この地方の弥生時代の遺跡の在り方について、新しい見知を加えることとなった。さらに古墳時代になると、彼杵川東岸の沖積平地に高塚式の古墳の築造が始まり、「ひさご塚」古墳などの前方後円墳が出現するようになる。佐賀県西部から丘陵の鞍部を超え、谷筋を下って最初に広がる沖積平地の支配者が、ヤマト政権と結ばれたことを示すものと考えられる。ひさご塚古墳のやや奥側には、



第1図 ひさご塚古墳周辺の地形と遺跡分布図

14 牛の頭遺跡	15 赤木遺跡	16 彼杵川古墳群第4号墳	17 彼杵川古墳群第3号墳
18 彼杵川古墳群第2号墳	19 彼杵川古墳群第1号墳	20 上杉古墳群第1号墳	21 上杉古墳群第2号墳
22 カサンガン古墳	23 ひさご塚古墳	24 松山A遺跡	25 松山B遺跡
26 名切E遺跡	27 名切C遺跡	28 名切A遺跡	29 名切B
30 名切D遺跡	60 岡遺跡	61 白井川遺跡	62 島田遺跡

彼杵川古墳群があり、現在4基が残っている。この古墳群は、長崎県の本土部では数少ない高塚式の古墳群で、大村湾沿岸ではここ大村市の玖島崎古墳群、西彼杵郡時津町の前島古墳群に限られる。中世の遺跡としては、城跡のほか寺院跡が知られている。また、14世紀や15世紀の年号が刻まれた、五輪塔などの石碑も出土している。12世紀から16世紀にかけての遺物が、大量に出土した岡遺跡の存在も近年の発掘調査で知られたものである。

ひさご塚古墳周辺の遺跡についてであるが、14・15は縄文時代の遺物包含地で、24・25は先土器時代と縄文時代の遺物包含地である。24は九州横断自動車道の建設に伴う発掘調査で、大量の遺物が出土した松山A遺跡である。大量の遺物が出土したのは、石材供給地に恵まれていたことがその要因と考えられている。また、石礫などの供給基地的な役割を果たしていたことも考えられている。26～30も先土器時代から縄文時代にかけての遺物包含地である。

弥生時代の遺跡は近年まで知られていなかったが、開場整備に伴う発掘調査で詳細になりつつある。60の岡遺跡、61の白井川遺跡などである。ここでは住居址や墓地なども確認されている。62の島田遺跡は、古墳時代から中世にかけての遺物包含地である。60～62の各遺跡は、昭和58年の分布調査の時点での可能性が考えられていたが確証がなく、遺跡地図には未登録であった。その後、遺跡として確認され登録されたものであることを付け加えておく。

16～23は古墳である。16～21までは小形の円墳と考えられ、横穴式石室を持つものもある。22・23が今回報告のカサンガン古墳とひさご塚古墳である。図にはないが、ひさご塚古墳東方



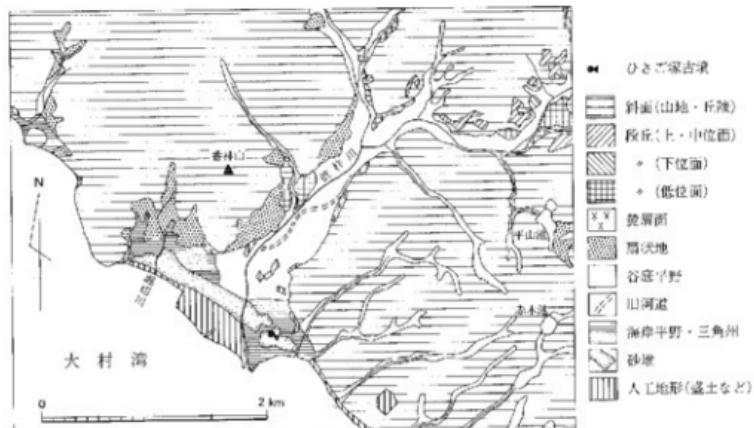
第2図 ひさご塚古墳周辺地形図

200m ほどの場所に、ワレ櫻現古墳があったと伝えられている。これらの古墳群と60~62の遺跡との関係については、興味深いものがある。今後の調査の課題でもある。彼杵小学校の近辺にも横穴式石室を持った古墳と思われるものの存在が伝えられているが、その詳細については明確ではない。

6は島田五輪塔群で、中世のものが混在している。中世の寺院については、存在したとする記録はあるが、発掘調査などで確認されたものはない。7は「松岳城」と呼ばれた城跡であるが、現在はわずかに石垣が残っている、といわれている。

第3図にひさご塚古墳周辺の地形分類図を示しているが、ひさご塚古墳・カサンガン古墳とともに海岸に形成されていた砂堆の上に構築されているのがわかる。このことは、今回の調査でも確認されたことで、さらに、この砂堆の中に溝状の深まりらしいものがあることも認められている。この砂堆の内側は現在も若干低くなっている。往時はラグーンになっていて弥生時代以来の生産の場として使われていたものであろう。そして、その外側の高まりを墳墓として使用していたことが考えられる。このことは、弥生時代のものと思われる石棺が、現彼杵中学校前の国道建設工事中に出土したことからも推測される。このほか、大村藩郷村記には、江戸時代に彼杵本陣近くで古い墓らしいものの出土が伝えられている。砂堆部の中央に近い場所で、ひさご塚古墳と彼杵中学校前の石棺の出土といわれる所との半ばほどにあたる。

後世になると、この砂堆の部分は後背地より一段上がった高擧地であったためか、居住地として利用されるに至り、現在に及んで町並みを形成している。



第3図 遺跡周辺の地形分類図

III 調 査

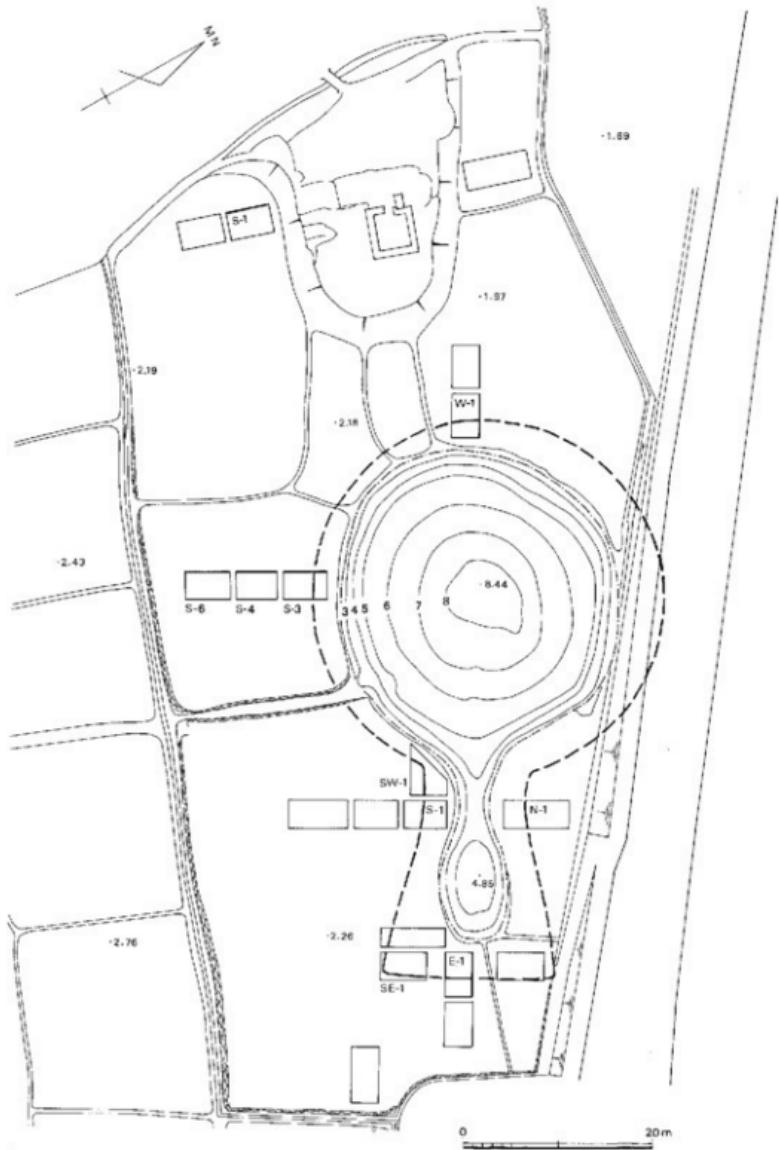
(1) 調査の概要

調査は平成2年11月26日から開始した。ひさご塚古墳とその周辺は草が茂っており、それらの伐採と片付けから始めた。27日からは墳丘の主軸線上に基準線を通し、その線上に基準点を設定した。各基準点から主軸に直交する線を伸ばし、試掘壙を設定していった。昼前から掘り始めたが、最初はくびれ部の北側の1箇所(N-1)と南側の2箇所(S-1,S-2)から始めた。午後には役場の前にある水準点から標高を移し、基準点の高さを出しておいた。くびれ部北側の試掘壙に、前方部の裾石と思われる石列が出はじめたので、この部分での作業を一応止めて前方部に伸ばした線上のE-1・E-2試掘壙の調査に移った。くびれ部の南側でも同様の石列が認められ、この石列が伸びると思われる、前方部の南側に試掘壙を設け(S E-1)、調査にかかった。同時にくびれ部の確認のためS-1試掘壙に接した西方に、後円部の裾に近付く形で試掘壙を作り、掘り方を始めた(SW-1)。ここでの調査で、墳丘の前方部の裾石が折れ曲り、後円部の外側に沿って伸びる状況が確認された。ここでは葺石の外側が低くなり、墳丘側に高くなっている状況と、外側の石は人頭大ほどの大きさがあり、墳丘側に向かうとやや小さくなる傾向が認められた。後円部中心の南側にも基準線を伸ばし、試掘壙3箇所を設けた。一番墳丘側に近い試掘壙に裾石と思われる石列が出てきたため、くびれ部から伸びる裾石と判断してその段階で掘り下げを止めた。この部分の南側は深く、黒褐色の粘質土が続いて、池か沼状のものであることが窺われた。この深い掘り込みは、墳丘の裾石から11m~12mの場所から浅くなっている状況がS-6試掘壙で確認された。主軸線上の後円部西側でも、墳丘の裾石と思われる石の列が検出され、葺石で覆われた古墳の裾であることが、ほぼ間違ないと判断された。

調査も後半になり、前方部の角の部分を確認する作業を始めた。S-1試掘壙の石列の延長を伸ばした場所にS E-3試掘壙を設け、その部分まで石列が達しているのを確認した。先に柱穴が出て掘り方を一時止めていたS E-1試掘壙を掘り下げ、前方部の角の、石列の折れ曲る部分を確認した。このことによって当初の目的のひとつであった、古墳築造時の墳丘の平面的な大きさを明らかにすることことができた。

ひさご塚古墳の調査に平行して、カサンガン古墳の周辺の調査も実施した。墓地となつている2mほどの高まりの裾の部分の南に2箇所(S-1,S-2)、と北側に1箇所(N-1)の試掘壙を設定した。ここでは、S-1試掘壙で拳大の石の不規則な集まりが認められただけで、古墳に関係するような遺構は認められなかった。S-1試掘壙の集石は、性格・時代ともに判然としないが、墳丘の裾石とは考えられない。またここでは弥生中期の土器片が出土している。

ひさご塚古墳とカサンガン古墳の試掘壙は、石の列を壊さないように砂を入れ、ビニールを敷いて目印とし、その上に掘り上げた土を入れて埋め戻した。



第4図 ひさご塚古墳および周辺の実測図 (1/600)

(2) 土層の状況

ひさご塚古墳周辺の土層は、基本的には次の4層に分けられる。しかし、自然の蓄力によつて、あるいは人為的に第4層が切られている状況も認められる。

1層は耕作土層で、2層がその床土となっている。2層は黄褐色を呈し、場所によっては小さな円礫を含んでいる。つき固められたものと思われ、よく縮まっている。3層は灰褐色を呈する礫混じりの砂質土層である。場所によっては上下で色調に違いが認められる。4層はこの古墳の乗る砂堆、砂礫丘の基本的な土層と考えられる。黄色をした砂層で、灰色の目立つ場所もある。自然堆積を示す、層となつた小礫や大小の砂粒の状態が観察される。

以上のほかに、5層としてE-1試掘壙やS E-1試掘壙で認められた黄灰色の砂礫層で固く縮まつた層がある。また、5層に酷似するが粘度の強い、濃い黄灰色粘質土層を5'層とした。6層として、5層や5'層の下に灰褐色粘質土層が認められる。このなかには、小円礫を含んでいる。紫色あるいは茶色に見える粘質土が混じり、かなり粘りは強い。6'層は青味の混じる層で、砂や礫が含まれている。7層は目の荒い砂や小さな円礫を含んだ青灰色の砂質の土層となっている。

今回の調査で、古墳の外側に運らせた石、古墳の葺石とそれを止める根石の内側に4層が残ること、外側には認められないことがわかった。また、葺石は床土の下の部分のみが残り、上部は削られて無くなっていることが判明した。そのため、床土の下から外方に降りていく葺石とその基底の部分のみが、石列状に続くものであることが確認された。のことから、ひさご塚古墳は4層の表面を整形し、外形の端部を削って基底面を作り、そこに人頭大の石を置き並べ、その上にやや小振りの石を順次積み上げ、墳丘を築造していった状況が推測される。

S-3試掘壙の南から徐々に深くなり、3層の下に5'層が続いている。S-4試掘壙では最も深くなり、S-6試掘壙では南に向いて上界を始めている。以上の3箇所の試掘壙の状況から、S-4試掘壙を最も深くし、その北と南側が高くなる、一種の瀧のようなものの存在が窺われた。しかし、この深まりが人為的なものかという点や、西側では存在が確認されていないので、平面の形はどのようになるのか、など不明な点がまだ残されている。

以上の土層は標準的なもので、場所によっては地中の鉄分などの影響によるものか判然としないが、非常に固く変化している土層も認められている。



4層 黄色砂層



5層 黄灰色砂礫土層



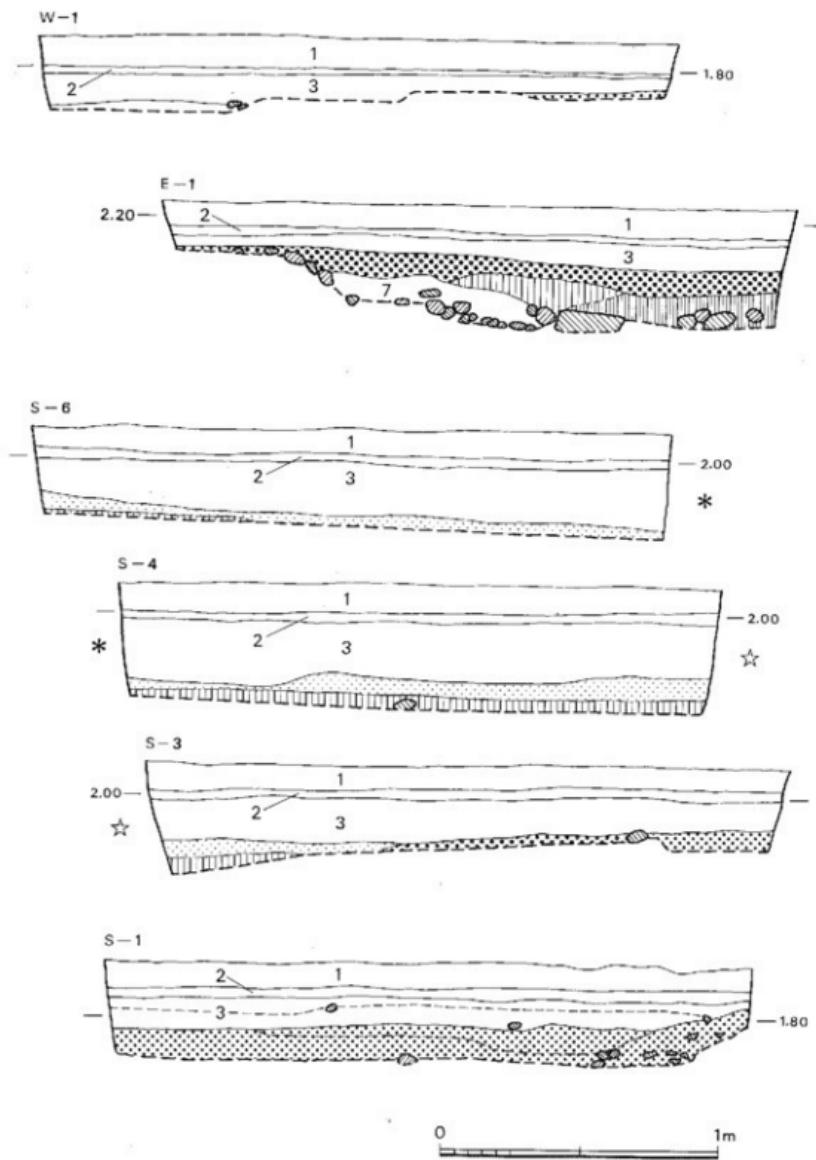
5'層 濃黄灰色粘質土層



6層 灰褐色粘質土層



6'層 青灰色粘質土層



第5図 ひきご塚古墳周辺の上層図

(3) 墳丘の状況

前方部の調査

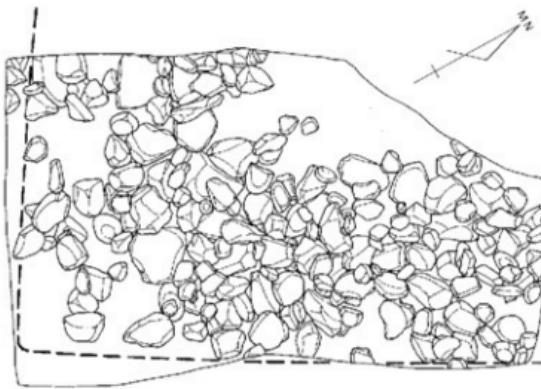
古墳の主軸線を東に伸ばして墳丘の外に出し、基準線の南側を現在残っている前方部の端から約1mの部分から掘ることとした。幅はここでも3mとした。便宜上E-1試掘壕とE-2試掘壕に分けたが、どちらの試掘壕からも石敷きが出はじめた。

E-2試掘壕の石敷きは幅が約1.5mから2m弱あり、古墳の主軸線に直交するような形で検出された。現在の前方部の端から8.5mから10.5mの間の場所である。ほぼ水平に敷石の面を描えた状況で、道路のようにも観察されたが確定できる材料はない。平らに敷かれていて、古墳に関係するような傾斜がないことから、古墳の葺石でないことは明白である。

E-1試掘壕の石の列は、最初S-1試掘壕やN-1試掘壕から見つかった石の列によく似た状況であり、掌大前後の大きさの円礫でこれが葺石の削り取られた上面の列であると考えた。検出時にはそこが墳丘の端と考えてそのままにしておいたが、後日確認のためその外側を掘り下げたところ、東側に徐々に低くなり、SW-1試掘壕のような墳丘の裾を思わせる状況となつた。そこで、その場所が古墳の最も外側の基底部分になるものと判断した。このことは、その内側までしか第4層がないことからも首肯できる。

このほか、主軸に直交する線をE-1試掘壕の西側の縁の線に沿って設定し、北側をNE-1試掘壕、南側をSE-1試掘壕とした。試掘壕の幅はそれぞれ3mとした。

NE-1試掘壕は後世の擾乱を受けており、試掘壕の南側の隅の一部に、古墳の葺石と思われる礫が残っているにすぎなかった。試掘壕の西縁の半分に、時期的には不明であるが掘り込ま



第6図 前方部 角の葺石の状況

れた痕跡があり、そのなかに砾が詰め込まれている状況が認められた。これらの石の詰め込まれた時期はそれほど古いものではないようで、それぞれの石の間には隙間がかなり残っていた。

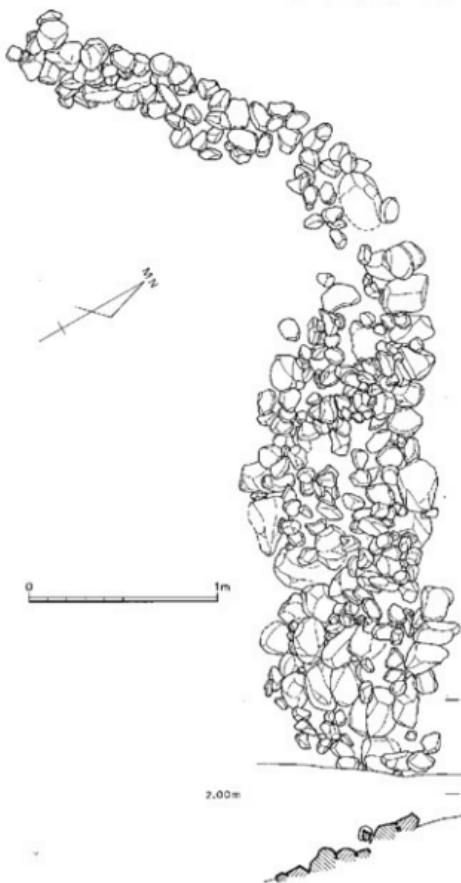
SE-1試掘場では、床土の下に柱穴が検出された。なかには根締め用の石を入れてあるものもあり、時代については確証もなく柱穴の削削を残したまま掘り下げた。しかし、くびれ部から伸びると思われる葺石の列は、予想された深さでも見つからず、そのままにしておいた。そして、S-1試掘場で確認された石の列の続きを確認するため、SE-1試掘場のすぐ西側にSE-3試掘場を設定して掘り下げたところ、この試掘場の西から東に伸びる石の列を確認した。このため、再度SE-1試掘場の掘り下げを行って、墳丘の前方部の角の部分、前方部前面からくびれ部分に向いて折れ曲ると考えられる部分を確認した。主軸線から約9mほど南側の場所にその幅がくる。

今回の調査では、前方部の角についてはこの部分を確認したのみで、主軸線の反対側での確認はしていない。国道に登る農道の下に入り込んでいる可能性が強く、この部分の確認は今後の調査に期待したい。前方部の幅としたのは、確認した角の部分を、主軸線を中心として反対側に折り返して求めた数値である。

くびれ部の調査

くびれ部の最も幅の狭い部分を主軸に直交する線で切り、その線の東側を3mの幅で掘り下げることした。主軸線の北側をN-1試掘場、南側をS-1、S-2試掘場とした。

N-1試掘場で、主軸から約4.5m



第7図 くびれ部 蓐石の状況

の位置に石の列が検出された。ほぼ前方部の裾の線に沿う形で伸びていることから、築造時の墳丘の裾に關係のあるものと考えた。しかし、この石の列は試掘壙の中央の部分が掘られており、コンクリートの塊が混じっていた。広告塔の基礎か、何らかの基礎とするために、掘り込まれていたものと推測される。

S-1試掘壙でも石の列が検出された。主軸線から約5mの場所で、これも前方部に開く形で伸びるものと考えられた。このため、この石の列を追うこととし、後円部側にS-W-1試掘壙を設定し、前方部側にはS-E-1試掘壙を設定した。S-W-1試掘壙は、後円部の裾に接するように設定して掘り下げたところ、前方部から続いた石列が外方に折れ曲がり、後円部の裾に沿って伸びる状況が確認された。この部分の石列の状況は、外側に行くにつれて深くなり、使用されている石材も人の頭ほどの大きさの石を積んでいることが判明した。形容を変えるならば、この古墳の築造にあたっては、人の頭ほどの大きさの石を整地した基礎の部分に並べ、盛り土を入れながら石を葺いていったことが窺えた。石材は角礫の角に丸味のあるもので、海岸のものと考えるより、河原の転石と考えるのが妥当と思われる。

後円部の南側の調査で、S-6試掘壙に濠の端部らしいものが確認されたので、くびれ部分での状況を見るためにS-2試掘壙の南に、S-5試掘壙を設定した。しかし、S-2試掘壙からの深さがそのまま残り、端の部分は確認できなかった。

くびれ部の調査で、本古墳の築造時の遺構が現水出面の下に、かなり良好な状態で残っているらしいことがわかった。それは、基礎の部分から墳丘の中央部に向いて傾斜つつのびる葺石の、最も下の部分である。調査はこの石の列を追う作業と、その裾の部分を確認する作業となつた。

後円部の調査

後円部は、主軸線に沿って西側の墳丘外に伸ばしたW-1、W-2試掘壙と、主軸に後円部の中央で直交する線に沿うS-3、S-4、S-6試掘壙を設けて掘り下げた。

W-1試掘壙では、ほぼ予想された場所から石列の上端部が検出された。現在の墳丘の裾から約1mのところである。この内側には第4層の黄色砂層があって、ほぼ墳丘の裾に間違いないものと思われる。この試掘壙とW-2試掘壙からは、古墳と直接には関係はないと考えられる石が不規則な状態で検出され、そのなかには、石棺材の可能性もある扁平な板石も混じっていた。このため、この部分は残されている葺石の上の部分のみを確認し、現状のままで埋め戻すこととした。ここで検出された石の面についての性格、置かれた時代などについて、今回の調査では明確にはできなかった。この部分には、周濠らしいものは認められなかった。

S-3試掘壙では、第4層のすぐ外側に、葺石の一部と思われる拳大の石の列が見られた。また、S-3試掘壙から徐々に深くなり、S-6試掘壙に至って浅くなる、溝か濠状のものが認められたが、その性格については断言できない。

(4) 墳丘について

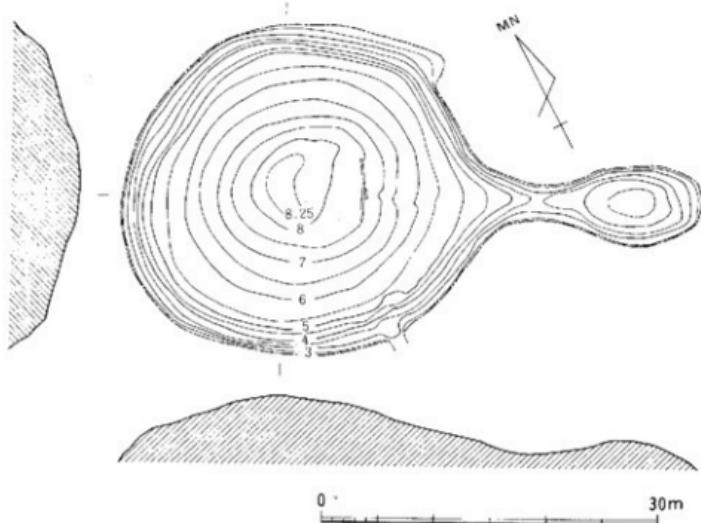
本古墳は、今回の調査にかかるまでは第8図の形として認識されていた。しかし、現在の形はかなり変わっており、もともとの形と規模については確認の必要が訴えられていた。この確認の作業が本調査の目的であったことは先に述べた。

今回の調査で得た各部分での数値上での知見と、それらの比較についてを、第1表としてまとめておいた。また、比較検討の参考になると思われる、県内と西九州地方の古式の前方後円墳も加えている。これらの比較内容等については後述するが、その前に周辺の前方後円墳の在り方について、簡単に述べておきたい。

長崎県内での前方後円墳は、偏りをもって存在している。即ち、全県で24あるいは25箇所ほどの前方後円墳が知られているが、対馬・壱岐に17箇所と約2/3以上が集まっている。しかしこの地域での調査の歴史は浅く、図の不足もあって資料として使えるものが限られた。

佐賀県では、横穴式石室を持つ新しい形のものは除けて、伊万里の空路寺古墳と金立の鏡子塚の2箇所をあげておいた。

福岡県では、唐津湾から博多湾にいたる背振山系北側の平地、糸島平野と福岡平野に望んで展開する古墳を挙げておいた。



第8図 ひさご塚古墳 墳丘現状図

以上の古墳を挙げたのは、前方後円墳の伝播が北部九州から松浦地方を海沿いに、あるいは佐賀平野を西に向かったとの考え方から、そのルート上のものを拾ってみたものである。

また、ひさご塚古墳の埋葬部は、現在墳丘の頂上部に残された石材から、板石をかなり使用した施設であろうと考えられるので、そのような施設が知られている古墳を選んだ。

以下、第1表の内容について、若干触れておきたい。

項目1は、全長に対する(1)後円部の大きさ、(2)くびれ部の幅、(3)前方部の幅の占める割合示している。(1)の数値が大きいほど細長い形、数値が小さいものはいわゆる寸詰まりの形といえる。この表のなかでは、3の出居塚古墳が細長い形で、1のひさご塚古墳には2・7・11のものがやや近い数値を示している。

項目の2は、後円部に対するくびれ部と前方部の大きさの比率である。(1)は後円部に対するくびれ部の大きさで、ひさご塚古墳は後円部の直径の約1/3の幅しかないことを示している。このように狭いのは6以外には見当たらず、他は1/3以上で1/2くらいまでの間におさまる。(2)は前方部の長さと後円部の直径との関係で、2の笠松天神社古墳と7がほぼ同じ比率となっている。(3)は前方部の幅と後円部との大きさの関係である。ひさご塚古墳の場合、直径のほぼ1/2となっていて、4・5に近い。これは表のうちで最も小さい部類にいるが、6・11はかなり前方部が開いている。

項目3は、くびれ部と前方部との関係で、(1)が大きいほど細い。(2)はくびれ部と前方部の幅の比で、数値が大きいほど開き具合が大きく、数が1に近いほど幅が狭くなる。くびれ部の幅の倍を超すものは6以外には認められない。

項目4は、前方部の長さと幅の比で、1を超すものは幅が長さより大きいもので、11は幅が長さの1.5倍ほどあり、3は長さが幅の3倍ほどの細長い形であることを示している。

以上のことから、明確に、どの古墳に相似する形であるとか、形態・規模から直接的に関連付けが可能というわけではない。一応、近いものもあり、感じとして時期的に近いという程度である。

次に、ひさご塚古墳の各部位における計測値について、若干検討しておきたい。

第2表として、ひさご塚古墳の計測値と、各尺で割った数字を挙げておいた。項目1では24cmを1尺として換算した数字を、項目2ではおなじく24.7cmで、項目3では24.9cmで換算した数字である。これらの数字のうち、整数に最も近いものを検討したのが項目の4である。これらの数字から見ると、項目2の尺を使用したとするのが妥当のようで、その数字を使用したとすると、全長と後円部の直径に30という数が共通で、各部位間に次のような関係が窺える。

- 全長8に対しても後円部が5を占める
- 前方部の幅は後円部の直径の半分、つまり半径に同じ
- くびれ部の幅は前方部の幅の3/5である

番 号	古墳名	後円部			前方部			項目1		項目2		項目3		項目4		参考 文献	
		① 全長	② 直径	③ 高さ	くびれ			④ 部の幅	⑤ 長さ	⑥ 幅	⑦ 高さ	⑧ ⑨	⑩ ⑪	⑫ ⑬	⑭ ⑮		
					①	②	③										
1	ひさご源古墳	58.8	37.7	6.3	11.0	21.1	18.5	2.6	(1) (2) (3)	1.56 5.35 3.18	(1) (2) (3)	3.42 1.79 2.04	(1) (2) (3)	1.92 1.68	1.14	1	
2	笠松穴神古墳 +α	34	22.0	2.5	9.6	12	14	1.4	(1) (2) (3)	1.55 3.54 2.43	(1) (2) (3)	2.29 1.83 1.57	(1) (2) (3)	1.25 1.46	0.86	2	
3	出屋原古墳 (麿の山古墳)	42	17	4	(8)	23	(8)	1	(1) (2) (3)	2.47 5.25 5.25	(1) (2) (3)	2.13 0.74 2.13	(1) (2) (3)	2.87 1.00	2.88	3	
4	立路寺古墳	80	42		23	38	22	3	(1) (2) (3)	1.90 3.48 3.64	(1) (2) (3)	1.83 1.11 1.91	(1) (2) (3)	1.65 0.96	1.73	4	
5	一貴山鏡子塚	103	61	9		(42)	31	4	(1) (2) (3)	1.69 — 3.32	(1) (2) (3)	— 1.45 1.97	(1) (2) (3)	— — 1.35	—	5	
6	御通共山古墳	約58	約31			7.5	約24	約25	(1) (2) (3)	1.77 7.33 2.20	(1) (2) (3)	4.13 1.29 1.24	(1) (2) (3)	3.20 3.33	0.96	6	
7	丸隈山古墳 (2段丘)	67.8	44	5.5	15	24	26	2.8	(1) (2) (3)	1.54 4.52 2.61	(1) (2) (3)	2.93 1.83 1.69	(1) (2) (3)	1.80 1.73	0.92	7	
8	若八幡古墳	47	25.4	3.5	13.1	23.1	20	2.2	(1) (2) (3)	1.85 3.59 2.35	(1) (2) (3)	1.94 1.10 1.27	(1) (2) (3)	1.76 1.53	1.16	8	
9	龜崎大塚古墳	62	38	(7)	15	27	(22)		(1) (2) (3)	1.63 4.13 2.82	(1) (2) (3)	2.33 1.41 1.73	(1) (2) (3)	1.80 1.47	1.23	9	
10	若司古墳	76	45		25	31	29	4	(1) (2) (3)	1.69 3.04 2.62	(1) (2) (3)	1.80 1.45 1.55	(1) (2) (3)	1.24 1.16	1.07	10	
11	那珂八幡古墳	(75)	50	5	(19)	(25)	(37)		(1) (2) (3)	1.50 3.95 2.03	(1) (2) (3)	2.63 2.00 1.35	(1) (2) (3)	1.32 1.95	0.68	11	
12	金立鏡子塚	96	58	8	26	38	33	4	(1) (2) (3)	1.66 3.69 2.90	(1) (2) (3)	2.23 1.53 1.76	(1) (2) (3)	1.46 1.27 (1.42)	1.15	12	

第1表 西九州の主要古式前方後円墳一覧表

		規模(m)	① ÷24.0	② ÷24.7	③ ÷24.9	④最も整数に近い ものとその数字
1	全長	58.8	245.0	238.0	236.1	①の245.0か ②の238.0→240
2	後円部の直径	37.7	157.0	152.6	151.4	③→150
3	前方部の長さ	21.1	87.9	85.4	84.7	②→85
4	前方部の幅	18.5	77.0	74.8	74.2	②→75
5	くびれ部の幅	11.0	45.0	44.6	43.3	①→45

第2表 ひさご塚古墳の諸元一覧表

第2表を見ると、古墳の設計段階で30尺を1単位とする基本単位があったのかも知れない、との推測も可能ではなかろうか。あるいは15尺の単位かも知れないが、その場合は比率として使用する際の数字が、やや繁雑なものとなるのは否めない。

基本とした単位があったとしても、本古墳の前方部の長さについては明確ではなく、疑問が残る。また、墳丘の高さについても、ここでは論じ得ない。将来の調査で、より明らかになるものと思われる。

参考文献

- 1 今回報告書分
- 2 「笠松天神社古墳」 長崎県田平町教育委員会 1989年
- 3 「考古学から見た対馬」『対馬の自然と文化』 九学会連合対馬共同調査会 1954年
- 4 「庚申堂塚調査報告」 佐賀県立博物館 1978年
- 5 小林行雄「一貴山銚子塚古墳の調査報告」
『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書16』 1952年
- 6 「三雲遺跡Ⅲ」 福岡県教育委員会 1982年
- 7 「丸隈山古墳Ⅱ」 福岡市教育委員会 1986年
- 8 「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」 福岡県教育委員会 1971年
- 9 「鋤崎古墳」 福岡市教育委員会 1984年
- 10 「老司古墳」 福岡市教育委員会 1989年
- 11 「那珂八幡古墳」 福岡市教育委員会 1986年
- 12 「銚子塚」 佐賀市教育委員会 1976年

(5) カサンガン古墳の調査

ひさご塚古墳のすぐ西側に、水田に囲まれて墓地がある。水田より約2m盛りあがり、上部はやや平坦になっているが、平面での形を見ると前方後円墳であったものと思われる。いくぶん変形しているが、全長25m前後、後円部の直径15mほどらしいが、前方部の形はかなりいびつになっている。主軸は、ほぼ東西に向いている。

今回の調査では、この高まりの端の部分を掘るにとどめた。すなわち、高まりの中央部で、主軸に直交する線を伸ばし、それに沿った北側の試掘壙をN-1試掘壙とし南側のものをS-1、S-2試掘壙とした。

N-1試掘壙は表土層の下の床土に接して、この近辺の基盤となっている黄色の砂が検出された。一部は小さな円礫も含んでいて、層となって堆積している状況から、自然の堆積面と判断した。そのためここには人工の施設はないと判断して、調査を終了した。

S-1、S-2試掘壙も、下層は黄色の砂礫層で、自然の堆積層である。ただ、床上と黄色の砂礫層の間に、灰褐色の砂礫層がはさまっている。基本的には黄色のものと同一の層で、後世に搅乱されたものと思われ、弥生式土器片などが混入していた。また、S-1試掘壙の北端部に集石状の遺構が認められた。拳大の石かややそれより大きな礫を集めたような状況であったが、面的な揃いは認められず、意図するところについては判然としなかった。列として伸びる状況ではなく、古墳に關係した施設とは認めがたい。

(6) 出土遺物について

今回の調査は、墳丘の形と規模の確認のため、周辺部に試掘縫を設けて掘り下げたもので、古墳の墳丘についての調査は行っていない。このため古墳と直接関係する出土品はない。ただ周辺の調査で若干の遺物が出土したが、今回の調査報告書には図・写真ともに示していない。先土器時代から縄文時代のものが多く、石器がほとんどである。器種としては、細石刃・剥片・スクレーパー・石錐・尖頭器・石匙・石鏃・蛇紋岩の石斧の破片など、多くの種類が含まれている。カサンガン古墳のS-1試掘壙からは、弥生中期の甕の口縁部も出土している。さらに、滑石製石鍋の破片も出土しており、連續とした生活の痕跡を示している。

ここで出土した遺物について特記すべきことは、多くのものが表面に擦過傷を負っているということである。これらの遺物が、黒曜石製であることが信じられないほどに表面が変化しているものも少なくないし、蛇紋岩の石斧の破片は剥離面の角がとれて丸みを帯びている。河川などの水流による移動に伴う痕跡とは、とても考えられない現象で、縄文時代以後の小海進の際の汀線にあったことの結果とも考えられるが、貝殻などの出土がなく疑問も残る。これらの遺物は、標高1mから2mの間に出土している。

IV まとめ

今回の調査で、以下のことについての知見を得た。

- (1) ひきご塚古墳は、大村湾に沿って形成された砂礫丘の、標高1.5m付近を水平に近く整形した上に築造されている。
- (2) 築造時には葺石が施されていたが、その基底部には人頭大の大きめの石を配し、上部はやや小さな石を使っている。
- (3) 築造時の墳丘の形は、大きめの後円部に細い前方部が付く形で、全体の長さを8とした場合、後円部が5の割合を占める。前方部の幅は後円部の半径と同じ大きさになる。
- (4) 本古墳の形に近いものを求めるとき、いずれもくびれ部がやや大きいが、壺路寺古墳・丸隈山古墳の2段目・鋤崎大塚古墳などに似たような比率の数字が認められる。
- (5) 全長と後円部の大きさは、24.7cmの尺で割った場合に整数に近く、その場合30尺を1単位としての企画性が推測される。
- (6) 復原した形や、使用されたと考えられる尺から、本古墳は5世紀の前半を中心とした築造年代を思わせる。
- (7) 墳丘の中央部に残っている板石の状況や、西北九州の前方後円墳の例などから、本古墳の埋葬施設として竪穴式石室か竪穴系の横口式石室の可能性も考えられる。

以上の状況が、今回の調査の成果といえども知れない。しかし、今回の調査は、細い管を覗いて全体の姿を求めていた感がないでもない。今後の方向として、埋葬主体部の確認・副葬品の出土状況の確認などを実施し、本古墳の成立の時期に迫る調査も必要であろう。さらに、古墳築造の企画性・築造方法・外部施設の有無などについての調査も考えられる。いずれの場合も、確たるもの意識のもとに、計画的な調査が望まれる。さらに本古墳の築造に関する、彼杵川一帯の弥生時代からの歴史的な流れや、周辺の遺跡との関わり合い、中央との結び付き等、当時の社会一般的な状況までの復原が望まれる。

本古墳が、生きた歴史上の教材として活用されることを切に願うものである。

最後になったが、調査にあたっては地元の皆様をはじめ、多くの方々の御協力とご助力を得た。作業に従事された方々も、師走の寒く忙しい時に大層お疲れでした。この紙面を借りて、本調査に関係された全ての方々に、厚くお礼を申し上げます。

図 版





北側から

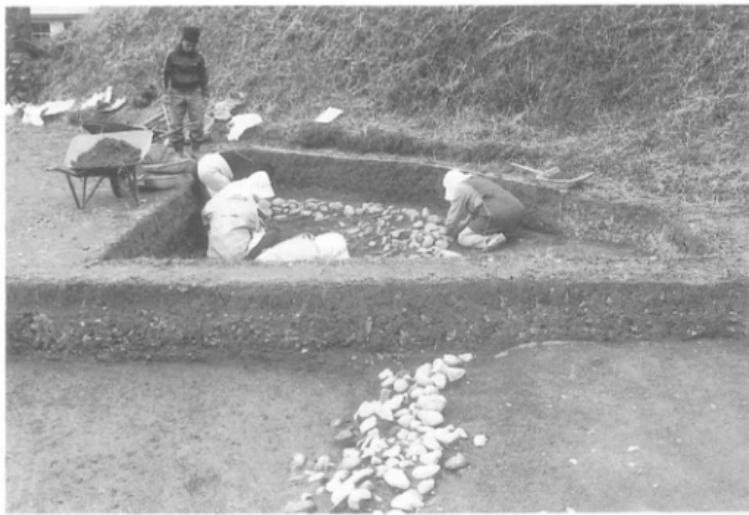
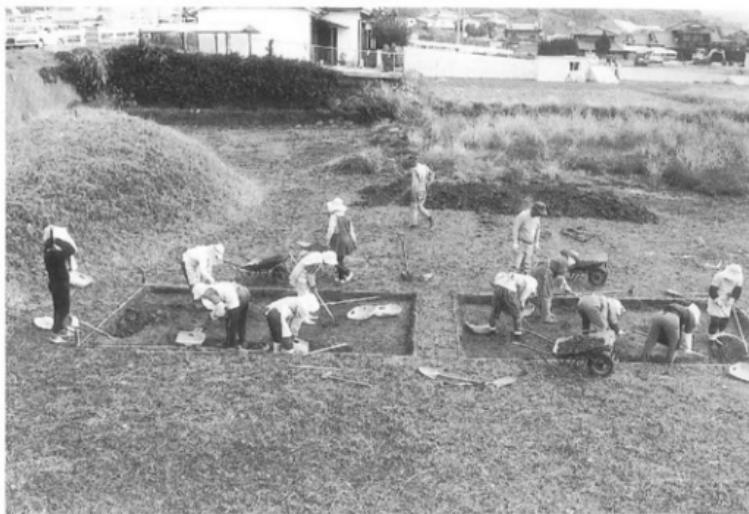


ひさご塚古墳遠景

東側から



近景と調査風景



前方部とくびれ部での調査風景



ひきご塚 N-1試掘場 西壁

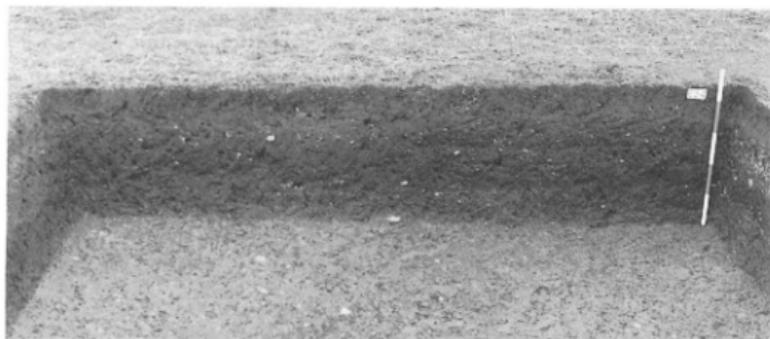


土層の状況

E-1試掘場 北壁



S-3試掘壙 西壁



S-4試掘壙 西壁



S-6試掘壙 西壁
土層の状況 (後円部)



前方部 角の葺石の状況



くびれ部 脊石の状況



後方がカサンガン古墳



カサンガン古墳と調査風景



S-1試掘場 西壁



N-1試掘場 西壁
カサンガン古墳の上層の状況

東彼杵町文化財調査報告書第5集

ひさご塚古墳

平成3年(1991)3月31日発行

発行者 東彼杵町教育委員会
長崎県東彼杵郡東彼杵町波佐宿第483番地
〒859-38 電話(0957)46-0353

印刷所 川口印刷株式会社
長崎市山中町1020-7
〒851-01 電話(0958)38-2181
